



春燈

2016
August

8
月号

主宰の句

安立公彦



決めかぬる返書一つや走り梅雨

夏山となりてや寛に桜島

深鉢に秘むる古代や夏館
(神奈川県歴史博物館)

アカシアの花の白妙多佳子の忌

校塔の返す夕日や凜と夏至

久保田万太郎の句

東京のまツたぐなかの霞かな

『冬三日月』昭和二十六年

この度新装なった歌舞伎座三階ロビーに、この句はあった。大観・観山等の絵や観世太夫・露伴の字の中に、掌より小さな絵馬にあの小さな字が丁度納まり、可愛いらしかった。歌舞伎座から霞が見られたかも知れないし、芝居の中の霞だったかも知れない。前回の歌舞伎座開場の祝句が、今度の歌舞伎座にも飾られてある。なんと、うれしいことかと思った。

三宅文子

久保田万太郎の句

更衣あはれ雀のきげんかな

「春燈」昭和三十八年

最後の日の詠とか。さっぱりと衣更えして庭の雀をいとおしく眺めている。元氣な雀は生そのもの。生き生きとした生を詠んでいる。この数時間後、唐突に生命を閉じられたなんて信じ難い思いだ。作品に「あはれ」が時々ま出てくる。使われ方が広く意味も深い。ああという嘆息、無常感等々色々。これ等の「あはれ」を適確に使ってしみじみ情趣のある句を作られた。

長谷川歌子

燈下集



○ 小張志げ

愛鳥週間をんなついでばむサラダバー
卵の花腐し桶に沈める皿小鉢
黒揚羽樹海の闇をひきずり来
黴拭ふ捨つると決めし父の椅子
沖波の白きにぎはひ海開

○ 江草 礼

卯波立つ夕暮人を思ふ刻
彼の世への階段ゆるし大夕焼
ジギタリス挫折もありし一生かな
万古焼の急須艶ます涅槃西風
児らの声弾くる天守風涼し

○ 長谷川友子

夏雲遊ぶ池に古書院中書院
若楓法然院の萱の門
香を聞く借景涼しき庭に向き
子との距離はかり難しや金魚玉
夕風や束ねて小さき洗ひ髪

重さうな大輪の薔薇夕日中
蔓薔薇の百花一樹に競ひけり
亡母恋しリラの花咲く庭に立ち
川風に髪預けある夏はじめ
夏帽子押へて谷をのぞき込む

○ 白杵游児

海航かぬ総展帆や夏の雲

ペリーと会ひし大玉桶や夏落葉

大空襲偲ぶや朱夏の横浜史

銀食器の並ぶ食卓夏めきぬ

焼酎や憲法論議きりもなし

○ 岩永はるみ

鳥の声高きにありて立夏かな

辰雄忌や人なき庭の草苺

暮れつかた出できし風や桐の花

帆を上ぐや風湧きいづる夏の空(横浜一旬)

薰風や海見つづける少女像

○ 林 紀夫

単線の駅の卯の花腐しかな

巢立鳥来し方悔いのなかりけり

禅門へ続く道なり蟻の列

街角の開化の碑文緑さす(横浜一旬)

馬車道の「ソーラン踊り」街薄暑

○ 小泉貴弘

わが胸に吹き入るさくら吹雪かな

揺るるたび房ふつくらと藤の花

千体仏の千の仏心春深し

ぶらんこをちぐはぐに漕ぎ分かれけり

夢殿の見ゆるベンチや柿若葉

○ 中野さき江

聖五月をんなの腕の暮残る

余念なき念の化粧や五月来る

宵祭ひと雨あとの囃子かな

人波を縫ふや祭の浴衣着て

宵宮や若い衆の履く女下駄

○ 成田なな女

夏帯をきりりと結び茶の湯かな

夏帽子互ひに振りて別れけり

草餅や子の世安かれと祈りけり

用水の水たつぷりと植田かな

八橋を子等と渡るや花菖蒲

○ 栗原完爾

上つ毛の風が好きなり葱坊主
鉄塔を風吹き上ぐる立夏かな
うらうらと踊子草に葉生れ
猫好きの話好きなり豆の花
九条改正是非論草を引きにけり

○ 小菅礼子

忘れ得ぬ疎開の日々や昭和の日
身ほとりに妣の声して露を採る
アルバムに若き日のはは母の日や
妣からの終の文読む母の日や
庭石の陰に床しや白糸草

○ 生田高子

唯一つ祭日の無き六月来
枕頭に読みさしの本明易し
砂浴びの雀見てをり釣忍
笑はずな舐めてゐるところ
群青の額紫陽花を所望せり

○ 本多遊方

あめつちに不義理を重ね更衣
無沙汰の日々気づけば青葉ぐもりかな
脇役に徹し十葉の茂るかな
わが無明へ蚩袋を供花とせり
蓮浮葉明日の水を得たりけり

○ 武田巨子

菖蒲葺く母在りし日のその場所に
石塔の文字の読めず麦の秋
馬鈴薯の京のはづれの花盛り
夏瘦や閻魔の秤指で押し
団扇風小分けに使ひもてなせり

○ 諸岡孝子

しほがまのほろと崩るる炉の別れ
忌日かなまだ房なさぬ雨の藤
道をしへ翔ぶほかのなく翔びにけり
辺境の日輪青し栗の花
一恙の機嫌伺ひ薄単衣

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

爽立てる松や裾濃に五月富士

懐かしの香をきく藤の昼下り

万国旗そよぐかに風の牡丹園

草笛やむかし兄ゐて弟も

明易の松濤を聞く旅心

○ 大森道生

子供の日「はい」と答へる遺影の子

亡き人のままの表札梅雨に入る

富士山麓一望千里新樹なる

手つかずの闇を濡らすや時鳥

笹の子を手折らば遠き山の声

○ 鶴岡紀代

三社祭近き格子戸磨きけり

母許に姉妹そろふ穴子ずし

藍つむぎ身八口の風夏めきぬ

独り居の闇を深めて五月雨るる

夕波や夫若き日の白舁

○ 吉村さよ子

薫風や水面に出づる亀の顔

生れたての尺蠖歩む石の上

二人乗るリフトの軋み薄暑光

夏めくや寛にたゆたに野辺の花

走り梅雨口笛ほそく鯉呼ばふ

○ 石橋邦子

注連かざる夏越の茅の輪くぐりけり

青梅雨や古典講座の開講す

青鬼灯太宰忌子の忌近きかな

紫陽花や風にのり来る鳥のこゑ

軍服の父に合掌父の忌来

春燈の句

安立 公彦選

蜘蛛の団に掛かる滴や坊泊り

東京 小林文良

この街に住み古り樟の若葉かな

ねぢ花や身を振絞るスカイツリー

串にまだ斑の鮮しき山女かな

ゴスペルソング波止の市場の大南風

東京 中澤 弘

勝ち守り戴く古刹青嵐

敦忌や絵にユトリロの母のぬて

薔薇剪るや不協和音のプレリユード

北国の鰯釣る男国言葉

神奈川 長坂 正昭

六月や川はにごりて海に入る

人情のからみまとふや梅雨湿り

生きてゐることのあかしや夜涼の灯

転勤挨拶土佐の夏柑提げて来ぬ

埼玉 滝澤 千枝

五月晴家事一切に使ひきる



早朝の草引く刻を行ととして

短夜や幾度も地震にとび起きて

晩春や一音欠くるハーモニカ

打水や父母の横顔蘇る

東京 鈴木としお

法衣着て教師二足やつつじ咲く

思ひ遣りいまも心に額の花

釣鐘草束ねて野良の土産とす

馬鈴薯の花ほの白き愁ひかな

千葉 田村 初枝

袋掛馴れたる友の逞しく

行きかけの足とどめ見る七変化

ペリー来航鎖国の民の眼炎ゆ(舞臺筆名) 神奈川 河本由紀子

見上ぐるや威風薄暑の街正す(横浜正金銀)

一つ座を新茶程好く治めけり

六歳児六月六日のピアノかな

余言

安立公彦

メーデーや末尾十人晝職

小林のり人

メーデーという晩春の季語には、それぞれの人がそれぞれの思い出を持つていよう。その人たちは、多くは戦後の時代に脇目もふらず働いてきた人たちである。

この句。「末尾十人晝職」が全てを語る。メーデーの最後尾に就いている同業の仲間、それは作者と同じ「晝職」という。この中七下五の三つの言葉が「メーデー」というものの現況を、真摯なそしてその中に若干の滑稽味を帯びた表現でまとめてある。伸びやかなリズムが佳い。

キングの塔ジャックの塔や夏兆す

三上 程子

第五回神奈川支部大会での作品。場所は横浜。横浜には歴史ある建築物が、今も生活の中に共存している。ここにあるキングの塔は神奈川県庁本館。ジャックは横浜市開港記念会館の時計塔、更にクイーンと呼ばれる横浜税関の塔

とともに、横浜三塔として親しまれている。

この句。その中の二塔を併記して、横浜という全国の国際貿易港を持つ都市の姿を浮かび上がらせている。キング、ジャックの語が、夏兆すと佳く響きあっている。

ほととぎす鳴くや文明開化の地 三宅 文子

横浜の作品を続ける。一八五三年（嘉永六年）・東インド艦隊を率いて浦賀に来航したペリーは、翌年横浜で日米和親条約を結ぶ。横浜開港の第一歩であり、それは日本の文明開化の第一ページでもあった。

横浜を紹介するパンフレットの中に、横浜に残る文明開化の絵地図がある。鉄道創業の地に始まり、日刊新聞発祥の地、近代街路樹発祥の地ほか、三〇近い近代化の原点が出ている。これは中区という市の中心部のみもの。横浜全体では数え切れない原点的地がある。この句・時鳥は古来和歌を通じて、花、時鳥、月、雪と・四季の詠題とされて来た。それを文明の近代化に置き替えると、「ほととぎす」こそ、「文明開化」にふさわしい季語と言えよう。

馬車道の「ソーラン踊り」街薄暮 林 紀夫

神奈川支部大会の日は、折から横浜開港記念の日程の中

にあった。日本丸の総帆展帆や、目抜き通りでの催しが幾つか繰り広げられていた。馬車道でのパレードもその一つ。ここには県内各地から催事に参加した幾組かのグループが工夫を凝らして踊っている。その中で、「ソーラン踊り」の一組は、一〇名ほどの若者が鮮やかな衣裳で、ソーラン節の曲に合わせて踊るといふ華やかなものだった。

この句の「馬車道」は、文明開化を象徴する横浜の主要街路。風情ある街並を見せる。ソーラン踊りとの取合せも申し分ない。踊る男女の姿が眼前に彷彿とする。

金融の光陰きさむ夏館（自横濱芝蔭） 小山 繁子

横浜正金銀行は、外国貿易金融を専業とする明治一三年設立の特殊銀行。戦後東京銀行（三菱東京UFJ銀行）として再出発。昭和四二年県立博物館として新たな歩みに入る。現在は神奈川県立歴史博物館。相模の古代から近代までの資料を展示。しかし今年六月から老朽に伴う全館改修に入り再開は平成三〇年四月とのことである。

この句、戦前「まぼろしの紙幣」と称された横濱正金銀行券を中国大陸で流通させるなど、まさに「金融の光陰」の修羅場を経た歴史を持つ銀行への思いがよく出ている。

緑蔭や旧家の離れ開け放ち

高橋 和女

一読風景が目には浮かぶ句だ。その土地に久しく続いてき

た格式のある家柄なのだろう。母屋から離れた「離れ」の建家。今その「離れ」の戸障子が開け放されている。庭は一面の芝生。木立の緑蔭が「離れ」に涼しい影を伸ばしている。清々しい思いが読後の印象を深める。日本家屋の良さ、そして「開け放つ」の下五がいさぎよい。

団扇風小分けに使ひもてなせり 武田 巨子

この句を見ていると、主と客の二人の姿がさやかに思い浮かんでくる。背景は開け放された和室。話の間も、団扇を小さく動かせ客に涼風を送る作者。客も婦人だろう。話は尽きない。「小分けに使ひ」「もてなせり」が、その場の雰囲気や鮮やかに表現している。「小分けに使ひ」の中七がことにみごとだ。

棟咲いて心のびづみゆるびけり 篠原 幸子

「棟の花」、懐かしい花だ。私の郷里では梅檀と呼んでいた。高木雄大な樹枝に、その花は「あふち」の語感そのままに淡く上品な彩りを見せていた。

この句、作者はいま棟の花を仰いでいる。高枝の葉越しに咲く棟の花はうつくしい。それは「心のびづみ」をしほし緩やかにする。どこからか、「そうだ、それでいい」という声が聞こえて来る。風の声か、親しみに充ちた声だ。